

'92年実践と省察

スターリン主義の歴史的破産のなかでわれわれは、スターリニストが客観的真理の実在としての科学主義の措定と、全体主義的組織集約のもとで、人間がその類的本質のうちにもつ能動性、積極性、組織性を、「法則性」の名のもとに「アメリカ的事務能力とロシア的革命的進取の精神」というような極めて従属的なものに分離し、いちじるしく人間性の疎外をもたらしてきたことを対象化してきた。だからこそ文字どおり「歴史的必然」としてそれは人民に打倒されたのだということをくりかえし訴えてきたのでもある。

しかしそういうわれわれにあっても彼らのスターリニスト的発想から完全に自由ではなく、日々再生産されるブルジョアイデオロギーを無自覚に受け入れる限り、ゴルバチョフのように資本主義に対して思想的恭順を強いられていく以外ない。ゆえに求められることは不断なる自己変革、己の実践の省察を通じた階級としての自己形成をこれからも押し進めていくことであると思う。

本省察においてめざすことは、八九事態以来のわれわれの具体的な陥穽を捉えかえし、それを克服する途を見いだすことである。とりわけわが支部にあつてはシンパの離反や、組織構成員の消耗、後退がわずか半年の間に起こり、組織建設における過渡性が明らかになった訳であり、この問題を「だれの責任か」などというような

論議に終始させず、彼らをもふくむ支部総体の物の見方、考え方の中に現れたスターリン主義的な発想を、歴史生成的な組織実践から省み、それをいかに乗り越えていくのかを問題にしたいと思っている。

一、なぜわれわれはB同志を変革できなかったのか

事態を捉え返す前にまずおさえておきたいのだが、ここではわれわれがめざすべき組織なり、めざすべき同志的關係なるものを導きだすものとして、この間の実践を省察していこうとしているのではないことである。つまりここで確認できることは、過去から現在に至る過程でなにを考え、そこでどのように実践したのかという捉え返しであり、その捉え返しを通じてのみ、われわれのものの考え方、価値観なりを検証し、修正するなり発展させていくことができると思うのだ。その意味では、全く実践と結合しえない観念的な理想を「これが誤りだからこれに」という具合に対置していくつらなりには自己変革も組織的前進もありえず、ゆえに永遠の現状維持に終始するのみであることをなんども確認しなければならない。

われわれは、この間反PKOの闘争の組織化を通じて党の外延的發展を指向しながらも、同時に組織内の共同主観性の高次化を目指すものとしての党の内延的發展を第一義の課題として、イデオロギー的な底上げをはかり、また「実践と省察」等を通じた総括作業を深化させてきた。

当時わが支部にあっても九二年の初頭以降、それまで本部社防を担っていた同志をむかえるなかで新しい体制

として出発することになり、昨年メンバーになったA同志と、結集をまじかにしたB同志をもふくめ、われわれ支部総体の団結の形成を基軸にしながら組織建設を押し進めていったのである。

そこでは他者の精神労働に学び、そこで他者を見いだしながら、互いに教え、教えられていく関係をつくり、それをつうじた組織としての団結の形成を第一の課題として、具体的にはB同志の結集を目標にしながら春の闘いに乗り込んでいった。

三月の反基地ツアーを皮切りとして春夏期の闘いは開始されていった。われわれは闘争の豊富化を促すために『戦旗』の戦略論文などの学習会を行い、反PKO闘争の戦略的位置を明らかにしようとした。またそれと同時にB同志のメンバーへの結集を展望しながら『一人が万人のために、万人が一人のために』のイデオロギー的学習も平行して行い、そこでの意見や討論の活発な交流を問題にして、意識的、積極的な関わりをめざしていったのである。

しかしこれらの学習会をつうじ、B同志との関係が深まったのかといえ、逆に彼との間に溝を作ってしまったというのが率直な感想であった。学習をつうじ彼の心を開いていくというよりは、課題に沿って彼の意見を求めていくというように、こちらのペースで学習会を進行させてしまったといえるのである。

何回かB同志の意見ならぬ不満で学習会が紛糾したことがあった。しかしそのときわたしが彼に対し語る言葉がなぜ理解できないのかということ、彼の論理の系なかで考えるのではなくて、難しい記述をいかにわかりやすく教えられるのかといった形態の問題として捉えていたのだ。だからB同志にとってはますます学習会が位置付かないものになっていたのである。

目的意識的意志を共有するわれわれとくらべ、自我ではあるが自然発生的意思をもった主体に対して、だれ

かかまわず同一の枠をはめようとするほど無理なものはない。彼（彼女）のフィールドでわれわれがどのようなアプローチができるのかは千差万別であり、百人の人がいれば百通りの方法が取られるのが正しい。しかしここで求められるのは、彼（彼女）の問題意識を変革する主体の側の目的意識性である。対象に拝跪したり、逆に啓蒙するといった関わりの延長上に彼らの主体形成はありえないのである。

B同志は、われわれと関わる以前は他の党派と関係を取り結んでおり、そういった経緯からいえばこちらが彼をその党派から逆オルグした形になる。しかしその過程で、当時彼が関係していた党派の独断的な作風を批判するその内容が、きわめて市民主義的な暴力反対の立場からの批判に止まっていたのではないかと思うのである。すなわち当時彼に対し提起していた内容は、その党派の欠点をあげつらねることをもって、彼とその党派を切り離すといったことに切り縮められていたものであり、戦術としては妥当であったし、確かに成果をあげたのだが、彼がその党派からの内容的な乗り越えを目指していない点において、内容的な関わりの不充分性をそもそも捉え返しておくべきであったのではないかと思う。

しかしそれにも増して問題であったのは、われわれの側のB同志にたいする主観的な思い込みや、理想から推し量って彼の結集を展望していたことにある。具体的には彼が戦旗派に結集してもいいと言ったことをもって、短絡的に彼は戦旗派に対しシンパシーをもっているなどと思い込んでしまい、その結果として結集のためのオルグにはいっていくというように、彼はこうであってほしいというこちらの願望がまずあり、それにあわせてB同志の行動なり発言を解釈していくのである。つまり観念的、理想的な思いに合わせて現実を措置していくという構図のもとで他者を解釈したり、ないしは否定していたといえる。これでは彼の真意を共有していくことにはならず、内容的な結合もかち取れないのは目に見えていたのだ。

自分の価値観で他者を見て、いろいろと論評することは可能であり、楽だけでも、それではいつまでたって

もその対象との接点は見いだせないものである。ここでは彼（彼女）がなにを考えているのかを彼（彼女）の立場で考え、そこでの彼（彼女）の悩み、苦しみなどを共有していける関わりをいかにつくっていけるのが問題だと思う。○か×かといった評価や、逆に結論はないというようにうやむやな問題の立て方を実践的に変えていかねばならないと思う。

しかしわれわれは討論などを組織するときに、知らず知らずそのような傾向におちいつているのである。批判者でありかつ被批判者でもある主体としてのわたしは、対象のおちいつている陥穽（批判者にとってであり、彼らには当為である）を批判する場合、彼（彼女）が極めてストレスをとまなうということをも同時に認識しているはずである。なぜなら彼らが悩み、悶え苦しんでいる過程は当然、自分にも当てはまるわけであり、それだけに主観的な関わりや、自らを非在化した問題の立て方は出来えないからである。しかし実際は「あなたの陥穽は何々である」などと、それ自身は全く正しい批判であったにしても、対象との関係を全く無視したところで提起してしまうことがしばしばある。

理論の整合性や妥当性からのみ推し量って、対象に正論を強制していったり、彼（彼女）のみの問題に切り縮められていく討論や批判の連なりでは、彼（彼女）の問題意識を共有することなどできず、いつまでも他者の痛みに無自覚でしかありえないのだ。

われわれが他者を見いだしていくその営為には、他者の痛みを理解し、お互いの苦しさ困難を引受けていくという、行政や機能に捕らわれない積極的な共同性の創造を成していく過程が内包されていなければならないが、だからといって階級関係を超越した地平で、他者を理解なり解釈しようとすれば、おのずとそれは理由ぬきの団結Ⅱフラテルニテな階級融和をしか作りだしていくことにしかない。ゆえにわれわれが作りだしていく共同性は、本質的にいってマルクス・レーニンがめざしたコミュニン・ソヴィエトのコアになっていくものでしかあり

えないのである。

コミュニン、ソヴィエト、人民公社といったわれわれの先達がめざした組織建設の核心は、その組織が軍事・産業的な機能としての側面を有しながらも、生産的・人間的有機体としての側面をも同時に内包するということである。武装蜂起を準備し、戦闘においては人民の最先頭で戦い、そうした実践のなかで人民の解放への覚醒を促し、社会変革への基礎を培う前衛としての登場こそが求められるのだ。

ブルジョア社会的な家族といった、最少生産単位の止揚されたものとしての共同体的な生産単位をもその射程に入れた、生き生きとした社会。一人が万人のために、万人が一人のために生きかつ暮らせる社会の萌芽を、物質的にも、思想的にも創出していくのでなければならぬと思う。

多少観念的な提起になってしまったが、それをふまえながらつぎにわれわれがこの間どのような組織建設を指向し、そこでどのような現実を生みだしてきたのかを捉え返しておきたい。

二、他者を見いだす事についてわれわれが見失っていたものはなにか

前述したように、この春夏期において主要に問題になったことは、A同志やB同志をもふくむ組織総体としての団結の形成であり、具体的にめざしたもののとの関係でいえばわれわれの強固な核心と熱意をもってB同志の結集をいかにかち取っていくのかということにあった。殊に昨年結集したA同志が能動的に組織建設に関わってい

けるのが最大の課題であったといえる。だから毎週の会議でも積極的に討論をつくって彼の問題意識を換気し、そこでの内容的な結合を問題にしていたのである。

しかしA同志は一般社会の枠ぐみのなかで不断に疎外されており、理論書で自分の本棚をうめつくすほどの、意識としての「新左翼運動」にたいする憧憬とはうらはらに、月々の家賃も払えずサラ金からの莫大な借金をかかえるというような、きわめて脆弱な要素をもあわせもっていた。したがってわれわれの彼への関わりはどうしても生活指導（具体的には借金の手代わりなど）的なものも含まれずにはいられなかったのである。A同志自身の主体的な要素もあながち無視できないのであるが、こういった関係性のなかで次第にA同志は消耗を深めていったのであった。彼がわれわれにたいして求めたことは、無前提に自分を受け入れてくれる同志の存在であり、彼が組織にたいしてそのような幻想を抱いてしまったことについて捉え返しておかなければならない。

つまりA同志が思念している組織＝共同体は、彼のスターリン主義にたいするアンチとしての反前衛党なのであり、即時的に自己を許容し、内容抜きの団結を求めているという点でゲマインシャフトな組織を志向していたといえる。しかしそれに対しこちらが提示したものはもっとゲゼルシャフトな組織であった。詰まる所それにたいして彼は反発を深めていったということなのだ。

ちようどそのときわが支部の中堅のメンバーである同志が消耗し、組織実践を放棄することのなかで、組織総体の団結もきわめて希薄なものとなり、A同志の反発にも拍車がかかっていったのであるが、ここでのより本質的な問題は、彼の個人的な資質問題を善か悪かといった二元論的な視点で見いだしていこうとしていたことにある。

これは前章でも問題にしたことであるが、われわれとA同志との関係が対等の同志的な関係としては位置付かずに、全能者としての戦旗派の活動家が彼に啓蒙するといった、客観的真理から天下って大衆を教育していく

という従属的な関係に終始していたということである。これはなにもA同志の問題に限られた問題ではなく、われわれ総体の組織観を象徴的にあらわしたものでしかない。つまりこの間のわが支部の組織運営はそのことを如実に表しているといえるのだ。形式主義とでも言おうか、そこではまず支部キャップより党的な内容の方針提起がなされ、それになりたいする個別の意見が求められるわけだが、「わたしはこの意志統一についてこのような感想を持ちました」という先生―生徒の会話が、会議に参加している人数分だけ話されるというように、相互の交通のない討論に終始していたのである。すこし大げさな表現であるが、指導するキャップとわたしというような系でのみ、その意味では同志的關係が成立していたとしても（それも一方から一方への通行をしな意味しないが）支部キャップを媒介しない私と彼（彼女）の關係は断絶されている――このように書くにあたかも外在的要素のようだが――といわねばならない。

このような現れを下部主義だと論断するのはたやすい。しかし問題なのはここでのわれわれ自身の何々主義を認識することではない。レーニンも言うように前衛党とは人民の護民官なのであり、そこでの組織構成員は人民の目的意識の組織化をめざす自覺的変革者であるはずである。しかし「共同主観性の獲得をもって人民の組織化を」といつている自分たちがブルジョア的上下達のヒエラルキーから自由でなく、上級の指導を願うだけの「傭兵」では、何をめざし闘うのかという意義まで見失ってしまうのではないか。ゆえにそういった現実にたいし、それをいかに越えていくのかを実践的に問題にしなければならないと思うのだ。

批判や討論を組織していく場合、まずめざしていくものは、所与の目的、価値観をどのような形で相互理解していくのかといった問題把握を乗り越えていくことにある。確かに党的に提起された諸内容をいかにわれわれが物質化していくのかという過程においては、所与の内容を自らの問題意識の中に位置付けるという点において、討論はしかるべくおこなわれていかねばならないと思うが、与えられたものを間違いなく受け取るためにのみ会

議や討論があるわけではなく、きわめて具体的な実践を党的な提起との関連で捉え返し、内容的な総括と創造的な方針の確定といったことをすべからず問題にしていかなければならないのである。

以前、支部の共同の自転車を手務との関係で使い、最寄りの駅の駐輪場に止め、そのまま鍵をなくしてしまつた同志にたいして、なかなかその自転車の回収を促すことができなかったことがある。共同の自転車なので特定の管理者がいたわけではなく、使用も個人に任されていたので、わたしは「いつかは回収してくれるだろう」ぐらいの気持ちで、さして問題にもできなかった。しかしいつまでたっても回収されず、業を煮やした支部キャップによつてそれが問題にされ、行政的に回収がなされたのである。しかも問題はそれにとどまらず回収された自転車に鍵を付けるといふ作業をその同志は怠つてしまい、事務所前に鍵なしで駐輪していた結果、とうとう盗難されてしまうというおそろ考えるかぎり最悪の、ギャグ漫画のオチのような事態に至つてしまつたのである。

確かに結果だけみれば自転車の鍵をなくした同志が自覚的に報告し、自分が回収できなければ時間的余裕のある同志に頼んで取つてきてもらうことはできたはずであり、回収した後も鍵を買つてきてつけることはできたはずである。しかしここで問題にしようとしているのはそんな子供に道義をしつけるような対処の在り方ではなく、支部総体の間主性性の不在であり、彼（彼女）を同志として見いだせない関わりの不充分性を、いかにして克服するのかといった問題にしか実際上は成りえない。

春の過程で、ブノペン政府のフンセン首相が来日した際、自衛隊のPKOへの派遣を要請した発言を捉えて、まずどのように感じるかといった質問が支部キャップからなされたことがある。それに対する私たちの答えは、極めて客観的な情勢分析に彩られていた。周知のようにフンセン首相は、カンボジア人民の植民地支配からの解放にむけた願いを踏みにじり、帝国主義に売り渡すというおそろマルクスレーニン主義者とは思えないような裏切りをおこなつたのであり、当然それに対する怒りを共有するものとしてキャップは設問したのであつたが、

あまりに私たちが客観的な感想に終始するので、ついになぜこのような発想に至ったのかという討論になっていたのである。

当初わたしはフンセンの立場からいえば、カンボジアの不況をいかにして解決するのかといった問題意識からだった政策であり、当然許されないにしてもそういった状況を見ておくべきだ、という発言をおこない、他の同志もわたしの意見とは別の回路から情勢分析をおこなっていたのであった。カンボジアにおける客観的な情勢の分析においては確かに妥当な意見にはちがいないが、われわれが目指すものから考えてそれが妥当であり、カンボジアの進むべき方向であるかという点については少なくともわたしは考えてなく、直截に言えば及びもつかなかったのである。

ここで捉え返せることは、わたしは自分の信ずるところの理解（それも客観的に）のみで物事を捉え返したり、実践していたのである。前述したように党的な提起との関係で、ないしは他者との討論との関係で自らの意見を共通意志＝共同主観性として高めていくことはまったく志向していなかったのだ。その意味ではエゴイスティックでアトミズムな組織をしか作ろうとしていなかったといえる。

これは組織建設という問題が機能的なもの、あるいはブルジョア社会的な従属的なものとしてしか位置付いておらず、それが革命党であっても「必要悪」以上の枠を出なかったということなのかかもしれない。まあそうは思わなくても組織を創造していく過程と組織集約という技術面の問題を区別せずに論じるというのは、わたしにすぎらずよくあることである。

例えば自分は口下手だし、頭も良くないから組織をまとめていくことや、ましてや団結の形成など出来ようはずもないと思っている彼（彼女）にあっては、自分がマルチタイプの人間になっていくことが指導者の条件だなどと捉えてしまいがちになる。アジテーターもオルガナイザーもイデオログも、われわれの組織建設過程か

らえば欠くことのできない、養成せねばならない人材だといえる。しかしそういった技能、能力が身につくことが、組織性の主体化とイコールで結ばれることはまずありえない。

図式化して見るとわかりやすいが、まずイデオロギーなどの技術があって、次に組織性や共同性といった本質的な価値観がその主体に備わっていくというようなことでは決してない。全く逆に組織性や共同性を培っていくその過程、営為のなかに技術的な要素も内包されうるということを押さえるのでなければならぬのである。

彼（彼女）は、アジテーションができない、論文が書けないといったことをもって、他の同志との関係で能力的に劣っていると思い込んでしまっているのだ。つまり自分には組織性がないと固く思い込んでいる彼（彼女）は、実は自らの劣等感を下部主義というレッテルで合理化しているにすぎない。彼（彼女）がそう思い込んでいるかぎり、自らの主体変革の行き着く先は「絶対者」としての完成された主体か、反対に落ちこぼれの「二流革命家」でしかない。

すこし極端な言い方であるが、こういった発想は紛れもなくこの間のわれわれの陥ってきたものの考え方の一端を表していると思う。自分にとっての自らが普遍的人間に至っていく過程と、党をつくり組織的前進を形成していく過程は、革命運動のなかの相互媒介的な問題であり、別々の問題として並列で論じられる問題ではないのだ。しかしそれがあたかも別々のもののように分離し、イデオロギーやアジテーションといった革命党にとっての機能的側面が必然的に獲得されなければならないものとして位置付いているのである。だからそれは義務的なもののごとくわれわれを呪縛するのだ。

しかし組織を作るということは、きわめて実践的な課題でありながら、実はより本質的な問題なのであり、めざすべき社会の萌芽を形成していくという意味で、きわめて重要な問題なのである。それゆえ形態的、技術的な組織性の獲得といったことは少なくともわれわれにとってはありえないということを確認するのだければ

ならない。

この間の現象的なメンバーの離反は、このようなわれわれの陥穽を裏付けている。共同性にあふれ、いきいきとした魅力ある組織なるものを理想として目指し、今ある組織の有りようをいかに高めていくのかを問題にできず、能力と形態に収斂させてしまったがゆえに、人民からは遠くなり、プロレタリア的なものからも次第にテイクオフしてしまっているのだ。

これは「人間の解放や共産主義の実現というものが、観念上のもではなく実践的なものだ」と言ってきたことが実は夢物語でしかなかったということの意味している。結集当初のあのみずみずしい感覚は失せ、動員も「お仕事」としか考えられない中間管理職にいつからわれわれはなってしまったのか。

結集当初、理論もなにもわからず、だけど倒すべき相手やその先になにかがあるのかを感覚で知っていた、その感覚こそ自分の核心であったはずであり、そしてその己の核心を、価値観を共有する同志との討論をつうじた組織実践のなかで不断に検証し、共同主観性という確固たるものにしていく連なりがいまのわれわれの実践にはなかったといえるのだ。他者を見いだし、教え教えられるっていく同志的な関係を、観念の上だけではない具体的な実践を通じて作っていく第一歩がこの省察であり、その意味であらゆる逡巡や迷いを乗り越えて第二歩を踏みだしていききたいと思う。

三、結語として

当初わたしはこの省察に際して、以上の捉え返しの後に実践的克服にむけて、レーニン組織論の教条的理解を越えるべく、結論めいた提起をなそうとしていた。つまりこの間の支部のありようを『何をなすべきか』におけるレーニン主義の形態的理解にあると思ひ、具体的には『何なす』の本質的理解にむけたノートを対置することをもって結論に変えようとしていたのである。

しかしその内容は会議において当然にも批判された。「いままでそんな討論などされてきてないだろ。」「田畑は自分自身がついに発見した真理を、みんなに押しつけようとしているのか。」まったく正しい。わたしは自身自身で「思いついた」教条を「絶対者」よろしく支部の同志に押しつけようとしていたのである。

考えてみれば、この間の捉え返しは、支部的に省察し始めたばかりで、これからも討論を継続しなければさらに深化した省察は得られないと思うのだ。その意味ではまだまだここでの省察は「過程」にしかすぎない。

そこから捉え返すに、われわれの実践には「終点」などとよべるメルクマールなどないんだ、ということがいえるのではないか。組織的前進といったところでA地点からB地点に至る過程は、真っ直ぐに上昇していくわけではなく、何度もおなじ誤りを繰り返し紆余曲折を経ながら、いわば「螺旋」のように登り続けていくしかないと思う。

レーニンは革命家は永遠の今を生きつづけると言ったが、つまりその本当の意味がやっとわたしにもわかったような気がするのである。常に現在の実践を捉え返し、省察していく連なりのなかに革命家にとっての永遠の今がある。

あり、組織のありようもまたある。重要なのは謙虚に自分（達）のありようを捉えかえすことができるのかというところにあるのではないだろうか。

しかし他者を目標（卑俗な意味で）にしたり、踏み台にしたり、また逆に従属したりしていく関係のなかに、組織を取り結んできた地区なり支部が、謙虚なあまりサークルと化してしまうなどということが、あながち笑話では済まない問題としてあるのだ。戸田マラソンの総括などであらわれた、疑似共同体的発想などはまさにその好見本である。つまり自己否定や自己批判といったものが、物象化された地平での倫理的否定として位置付いているというのがその本質であろうと思うが、そういった発想の根本にあるのが「結論」をアプリオリに認めていく、結果解釈、覚え込み型の組織集約であるのだと思う。

われわれはその意味で「終点」がないといっているのであって、なにもわれわれはメビウスの輪をさまよう「流浪の民」なのではない。結果解釈や覚え込み型の理想主義を越え、結果に至るプロセスをこそ共有している組織建設を成していくことが、だからこそ重要だと考えるのだ。

実践し捉え返し、それをふまえ再実践してまた捉え返す。一歩前進、二歩後退。しかしその次の一歩は、はじめの一歩より確実に前進している。われわれはゆっくりとだけどあきらめて歩みを止めず、粘り強く、執拗に、どんなことがあっても不変の課題＝革命をかならずやりとげてやる。

ゆえに今秋の決戦局面の運動展開にあっても、組織内における不干渉を克服し、お互いの能動性を引き出すような関わりを作りだし、もっていきいきとした大衆運動を構築していきたい。そしてその過程にあっては人民に教条を強制していったり、反対に拝跪してしまったりすることなく堂々と熱意をもって自衛隊派兵反対を語り、多くの労働者、学生、市民を階級闘争の舞台へといざなっていきたいと思う。

以上をもって少なくとも今の過程での省察を終わっていききたいと思う。